

---

# お題サイトから貰ってきた題材で作品書いてみる実験

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お題サイトから貰ってきた題材で作品書いてみる実験

### 【Nコード】

N2289U

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

あらすじ書き直し。

異世界トリップチートハーレム物。『幽霊のままなら武器も魔法も怖くない！勇者の身体に寄生して、オイシイトコだけ持つてくぜ！勇者に近づく女は残らず俺がイタダキマス！ この世界のオンナはぜんぶ俺のものだあ！』オンナの敵が勇者に憑依した模様。

## もくじ・設定 一覧

出典：まったり屋ぽればーれ（<http://nanos.jp/mattaripore/page/1/>）

<長編・ファンタジーであいうえお題>

暁の夢

いつもの町並み

占い師の予言

英雄伝説

掟か夢か

帰るときまで

キャラバン一行

暗がりの森

月下の踊り子

交易の街

祭壇の神剣

知られざる紋章

助っ人の男

精霊の導き

空に昇る光

立ち塞がる刺客

力の目覚め

告げられる使命

敵、あるいは味方

盗賊団アジト

仲間とは

逃げるも一手

抜け道の先で

眠りにつく横顔

野原に吹く風

花舞う都

広場の主

不完全な冠

壁画に住む妖精

星瞬く夜

魔物屋敷の亡霊

見えてきた真実

村雨の聖地

名水の湧く泉

守り人の謎掛け

山を統べる神

夕闇の迷宮

夜霧に浮かぶ影

楽園と呼ばれた遺跡

龍の守る扉

瑠璃色の湖面

黎明を照らす鏡

楼閣の女神

分かれ道、帰り道

ついでに登場人物たちも借りてきた。

出典：しばし待て、（<http://nanos.jp/3899/page/1/>）

< シンドローム6題 >

バーンアウト症候群〓敵役・魔王バーンアウト

充実感に満ちて仕事に没頭していた人が、燃え尽きたように突然に陥る無気力状態。

サンドイツチ症候群〓敵役・サンド將軍

上司と部下の板挟みになって起きる、中間管理職の人のうつ状態。

リマ症候群〓ヒロイン・リマ姫

人質事件などで犯人が人質に感化され、攻撃的態度が緩和されること。

ストックホルム症候群〓キーマン・ストック王子

長期にわたる監禁状態の中で、人質が警察に対する恐怖と敵意、犯人に対する好意的感情を抱く現象。

ピーター・パン症候群〓主人公・パン 主人公に憑依される裏主人公・ピーター

いつまでも大人社会に適応出来ない男性の心的病理現象。

バンビ症候群〓僧侶・バンビ

動物自身が持つ行動規範を擬人的に捉えすぎ、動物に対して人間自

身の価値観を押し付けてしまうような一連の態度。「動物は人間のような感情を持っている」「動物は人間を邪悪な存在と見なしている」などと思い込む状態。

縛り設定その1：同上、しばし待て、様より。

正義のヒーローの掟

その一 呼ばれたらすぐに来なくてはいけない

その二 強きをくじき、弱きを助けなければいけない

その三 悪者を倒さなければいけない

その四 その場に長居をしてはいけない

その五 町の復旧活動に参加してはいけない

縛り設定その2：主人公は一話で一回やり逃げる。

「ナンパ王に、俺はなる！」

以上。

さて、ぼちぼち頑張ろう。

## 暁の夢

「パンだよ」

「え？ パン様、ですか？」

「え？」

なんだかヘンな感じになったぞ。俺がくわえてた食パンのことじやなかったのかな？

ちよつと説明すると、ここはいわゆる天国つてところで。

俺の目の前には、白いアルデコっぽい服装の……ローマの石像なんかでよく見るあの衣装ね、あの服を着た女の子が立っている。ちよつと俺より背が低くて、見上げてくる視線が可愛い。

くるくるの金髪巻き毛が肩の上でふわふわして、青い大きな瞳が精一杯に見開かれて、真剣な眼差しを俺に向けてくるわけですよ。

周囲の風景は限りなく透明な水色。そんで、霞のような、霧のようない白い雲がすごい速さで流れ去っていく。俺の前後左右、上も下も。宙に浮くつて、こんななのか。

んで、死んでるつてのはこんな風にヘンテコリンな感覚なんだ、と妙に感心してたりするわけだ。

なんでこんな場所に居るのかつていうと、まあ、もちろん死んだからなワケだけでもさ。どうにも在りえないだろ、つて最期を迎えましたよ、俺。理不尽全開で。

今朝、行ってきましたつってパンくわえて玄関を飛び出したら異世界で、しかも目の前に偶然居たらしいデカイ怪物とバッチリ眼が合つて。で、一撃であっさり殺されたわけですが。

ドアを開けたら、そこは異世界。とか、なんのアニメ作品だつて。手違いで俺を呼んだ神様見習いの女神様に平身低頭で謝られた上に、なんでも願いを叶えてあげるとか言われて、取り合えず食ってます。

いや、返してもらった食パンをね。怪物に引つ叩かれた時に吹っ飛んだらしくってさ。

無くなったとかで、食パンがどんなモンかを女神様に事細かに説明した後の会話が冒頭部分ね。んで、会話の延長で俺の名前がオカシクなったと。奇妙ついでに女神様をこの後オイシクいただく算段ですが。

もぐもぐ。

俺？ 俺はしがない普通のナンパ師ですよ、もぐもぐ。

ちなみに二流大学在学中で映倫には引っかけりませんので悪しからず。中肉中背、黒髪黒目、ごくごく一般的な日本人男性、成人。それにしてもさ。

ちよつとどころじゃなく混乱してたから、欲しいモノ言われて「朝飯返して」とか、……ないわ！。

自分で自分に爆笑もんだワ。

「えーと、では、この世界で不自由のない程度の能力を授けたいと思いますので。

パン様に神界の祝福を。勇者とメシアの護りを授けたまえ。……あれ？」

なんにも起きないです、女神様。もぐもぐ。

ついでに言うと、俺、パンなんて名前じゃないです、女神様。超ドジッ娘め

こっちで訂正してやりやいいんだろうけど、なんか二ヨ二ヨが止まらん萌え状態だからヨシとする。

どうせすぐ生き返るんだ、仮の名前なんか何でもいいさ。

「ああ、どうしましょう、やっぱり貴方は選ばれた者ではないため、勇者のような奇跡の力を授けることは出来ないようです」

それより、今すぐ生き返ることも無理っぽいみたいね。どうするかね。予定が狂っちゃったよ。

せいぜい一晚程度のもんだと思ってたけど、帰れるまでに時間かかりそうだな……。

おっ、閃いた。

「じゃあさ、女神様。別のお詫びでいいですよ、俺、別に文句とか言うつもりもないし。」

やっぱり誰にも間違いつてあるじゃないスか、そんな困った顔されたらしゃーねえし」

「え……、でも、それでは貴方が……」

「どうせいつかは死ぬんだし。貴女みたいに可愛い女神様に逢えただけで儲けモンですって」

ちよつとロリの入った女神様はみるみる頬を赤く染めてオロオロしだす。かわいー。

「そ、それでは貴方があまりにもお気の毒です、わたしが間違えたばかりに戻れないかも……」

「いや、もう、ソレ、どーでもいいです。それより願いを叶えてもらえるのなら、俺はいつそ、貴女がほしい」

そつと手を取り、腰を取り。

今さりげなく重大な言葉を聞かされたような気もするが、それよりも重要なのはこの女神をどう口説くかだ。どうせ生き返ったら元の世界に戻されるんだ、なら、このチャンスは逃せない。

いや、だいたいが夢かも知れないしな、なんか色々ありえないし。女神が食えるなんて、夢だとしても滅多と見れないナイスな夢だぜ。

「え……」

頬を染めるロリ女神。  
いただきますっ。

めくるめく夢のひと時を貴女に。キラッ

口八丁、手八丁、嫌々をする女の子に無理強いはいけない、ここは辛抱強く、執念深く。

「あつ、あつ、ダメです、いけません、こういう事はあ……！」

いきなり胸にいくのは三流だ、まずはガードの弱い腰、肩、腕ときて頬をくすぐるように撫でる。

そんで指で撫でた同じ場所に軽いキスを三度ね。三度ですよ、大事なことなので二度言いました。縮こまつてる身体をほぐすように、ここでギュッと抱きしめてあげやう。

力が抜けてきたらOKの合図だから、後は煮るなり焼くなりお好きにどうぞ……

「ああ、どうしましょう、仮にも女神を名乗ろうという者がこのような……うつうつ、

叱られてしまいますっ、貴方のせいですからね、パン」

平手を食らわせようと迫る小さな手をひょいと捕まえて、その甲にキス。途端に女神は真っ赤になる。柔らかなボディライン、丸みを帯びた身体は少し肉感的で、そのふくよかな胸はたゆんだゆん。

男の浪漫、ここに極まれり。堪りません！。

嫌と言いつつ女神様、味気ない白一色だった背景をゴシッククロコ調に塗り替えていた。いつの間にか。乙女心の摩訶不思議。

女神の白い肌と重厚なベロアの布地がマッチして、ようやく中世世界のファンタジーっぽい絵面になってきたと思うんだが、どうだろう？

エンジ色のクッション、金系の刺繍に艶やかなレース、垂れ込めるカーテンは重圧な幾重のビロード。

その中に埋もれつつもくつきりと、くすんだ景色に縁取られる白き女体。

「もう良いです、貴方には呆れてしまいました」

優雅に軽やかに掲げられた女神の右腕を、中世の騎士そのままに恭しく一礼をして、そっと手に取る。

さっきよりも、さらに儀礼を込めた敬愛の口づけを。

「貴方は不思議な人ですね、パン。理不尽に殺されて、それなのにこんな……」

何か言おうとしている唇。睦言以外は聞きたくないです、女神様。  
「んっ、う、」

お喋りな唇は塞いでしまうことにするよ、とろけそうに潤んだ瞳では何を言っても説得力はないでしょう？

今はただ、俺の指先だけに集中していて。

そろりと背中伸びた腕が、遠慮しながら肌に触れてくる。

もどかしく、催促するように女神の細い手に力が籠もる。

『きて』、と。

長い口づけから開放された唇が、大きく息を吸い込んで、きゅつと閉じる。薄紅色の、艶やかな唇はとろりと濡れて光る。微かに開いた口内に扇情的な赤い舌が見えた。

頬にかかる金色の髪を掻き分け、可愛い耳たぶを顎わにしながら俺は右手を下腹部へと下ろす。左手は腕枕。彼女の形よい顎が心持ち上がるように、首の後ろに廻してのしかかる俺の身体を支えている。体重かけたら潰れてしまうし。

敏感な箇所を突然こすられて、細い身体がしなる。内腿から最奥の柔らかな茂みへと、触れるか触れないかの指先は滑るように昇っていく。

同時に、もう一度口づけを交わした後には軽く頬に触れ、そこから耳たぶへと移動して。

かかる吐息がくすぐったいのか、彼女は首を竦めて嫌々をした。

「ああ……じらさない、で、」

とろりとした蜜が、指先に絡んだ。

## 暁の夢（後書き）

縛り条件その2はやっぱキツイわ・  
・。  
そんで、R15の加減がわからん。

## いつもの町並み 1

どのくらいとうとうとしていたモンだろうか。

目が覚めると、女神様は俺の胸にすりすりしながらまどろんでいた。

やっぱり可愛い、可愛いは正義。

遅れて目覚めた女神様におはようのキスなんぞやらかして、ひとしきりジャレた後に女神は言った。

「ここにずっと居てくださっても構わないのですが……、」

それでは貴方が退屈してしまうでしょう？　だつてさ。可愛いなあ。

そんで今は神界とやらから抜け出して、二人でランデブー……ならぬ、下々の世界を見学中。右手に見えるのが、神界と下界をつなぐ、神殿でございまーす。てか？

ちなみに女神様は早々に神界へと戻って行ってしまった。困ったらずく呼べとか言つて、困つてなくても夜になったら困る予定だ、すぐ呼んでやる、いやむしろ馳せ参じる所存。

風来坊の俺と違って、正式の女神見習いともなれば、遊んでるわけにもいかないんだろうなあ。

なんにせよ、これで晴れて自由の身っ！

ん？　なんだか軽いノリだつて？

別に俺は、そこに女さえ居るなら、どこだろうが生きていける自信があるからな。

いくら可愛いロリ女神様であろうと、一人の女で満足するわけなどあるまいっ！！

漢ならナンパ、女を口説かぬ人生など意味はない、そうだろう諸兄！？

そう、例えば道行く人々の会話がまったく意味不明であろうとも……

……  
め、女神さま、ちょっとヘルプ!!

『どうかしましたか? パン』

金髪口リ女神、光臨。ふわりと宙を舞う優美な仕種、風をはらみ浮き上がるドレープ、広がるスリットから垣間見える生ふともも。生、ふ・と・も・も。

ごくりと喉が鳴る。不可侵なる絶対領域。

はっ、そうじゃない、そうじゃないんだ、俺! それも勿論、世界以上に大切なモノではあるが、今はそれは置いて、俺!

中世ヨーロッパの片田舎としか思えない、映画かゲームでしか見た覚えのないこの町並みにはまったく抵抗などありはしないが、飛び交う会話文はまったくもって意味不明!

どうかもクソも、言葉がまったく解かりません! いや、それ以上に、行き交う人々が遠慮なく俺の身体を通り抜けてくんだが、これってもしかして、いわゆる一つの幽霊状態ってヤツじゃなからうか?

疎外感ハンパねえな、これ。

飯の肉体とか、貰えるもんだとばかり思ってたぜ。こ、これでは俺の異世界千人斬り計画が!

ま、千人は大袈裟としても、ここは異世界、旅の恥は掻き捨てさ  
!

「女神様、これじゃ言葉が通じませんよ。それに、俺、もしかして幽霊のままで生きなくちゃいけないんですか?」

幽霊が生きたとか、微妙に奇妙だな。自分で言うという首をかしげてしまっぜ。

「ああ、ごめんなさい、説明が足りませんでした。……途中で貴方が悪いことをしてくるから……」

後半ポソッと。もじもじしながらのその視線は、なにごとか期待していて。今すぐここで押し倒したくなるな。乙女の期待に応える

ことこそ男子たる者の務めだからな。

ムラムラをムリして押し込めるのは、実は苦手な分野です。今は我慢、我慢だ、俺。

女神様の話によれば、どうやら俺は元の世界に帰してもらえない。やっぱり手違いだし、神様万能ならむしろ当たり前？つーか。

ただ、半人前の女神様にそれは無理なんで、もっと偉い神様の手が空くのを待つてほしい、という話だったりする。その偉い神様が俺を元の世界で生き返らせてくれるから、俺はこの世界で肉体を得ることは出来ないんだとさ。

「……それに……そのまま居てくだされば、神界への出入りも簡単ですし……」

真っ赤に頬を染めた女神様がポソツとラブコール。恥ずかし過ぎて顔から火イ吹いてるよ。

女神である前に、一人の女でありたい、みたいな？

くそう、可愛いぞ、たまらん！

「あつ！ パン、あそこです、あの青年が貴方と同調する事が出来る勇者です！」

さすがに往来でサカろうとしたら全力で拒まれた。顔面押しつけるのに必死ですが、残念です俺の熱き想いが伝わらないのは。て、俺の眼に指が刺さってます、女神様、痛い痛い。

ちなみに可愛い女神様の名前はフィリアだそうだ。女神フィリア。サカるのを諦めて彼女の身体を抱きしめる腕の力をちよつとだけ緩めたら、速攻で逃げられた。

ささっ、とか腕の中から抜け出して距離を取る。10メートルちよつと。そこで誤魔化すみたいにニコニコと作り笑いで後ろ手をもじもじ。

女神さまー、俺、無害ですよー。

昨夜はあんなに喜んでたのに、ヒドイわー。

「あつ、あのですね、パン。彼の名前はピートです、ピーター・エ

ルレイン。」

ふむ、二人合わせるとピーター・パンとか、狙いすぎじゃないですかね？

くすんだ金色の髪は、どうだろう、むしろハチミツ色とかいうんだろつか。灰色に近いかな。それで同じ色の瞳。体格もいいし、背中に背負っているブレードは業物みたいだ、柄の飾りが豪華っぽい。勇者というだけあって、装備はしっかりしたものを持っている。

ふっ、皆まで言うな、解かっているさ。これはアレだ、ようするに俺が奴に憑依するってことだ、小説なんかのテンプレだよな、別世界の人間に憑依してあーだこーだと介入するってパターン。

「でもご注意ください。貴方には神界の力が通じていますので、彼の中に入ってしまうと、彼を押しつけて貴方が表面に現れてしまいます。……出来れば、そのう……こちらの世界の歴史を改ざんしないように、お願いしたいのです。どうかお願いいたします」

「お願いされてしまいますから、ここは一つ静かな場所へ移動してですね、ゆっくりと今後の話なんかを、特に二人のこれからとか。とか？」

ムーンウォークで距離を詰め、そつとフィリアの両手を絡め取る。あのピートとかいううすらボケつとしてののが主人公なんだろうが、ヤロウに興味はまったくくない。憑依とかも面倒くさいんで願えるものならこのまま神界に引き返して、ロリ女神様とよろしくやりたい。

そんな俺のささやかな夢を、無慈悲なるかな、女神フィリアの突き飛ばしが粉碎する。

「えいつ」

ああっ、女神様ー！

可愛い、ちいちゃいお手で突き飛ばす仕様までが、また可愛い！

俺はムサイヤロウの肉体にスポッ。

視界が変わる、会話の内容がくつきりと聞き取れる。見慣れた、

いつもの町並みに切り替わった瞬間。今までとは反転して女神フィリアの姿は見えなくなった。

ああっ、女神様ー！！俺、号泣。

『では、よろしくお願いいたしますよ、パン』

心持ち、ほっとしたような口調で、フィリアは神界へと去ってしまった。

うつむ、よくよく考えたら、ほとんど説明されていないじゃないか、どうなってんだかさっぱりだ。

そこっ！ お前が聞いてねえんだ、とか言うな！

「ど、どうしたの、ピート？ 急に指、突き出して。なんもないよ？ そこ？」

おっと、隣の乙女は連れ合いだったか。これはこれは失礼致しました。

黒髪をさっぱり短くカットして、ボーイッシュないでたちをしているが、微かな胸の膨らみと柔らかな撫で肩は女性特有のもの。身長160cm、体重45kg、上から順に70、55、80と見た。他の男どもは誤魔化せても、俺のこの目は節穴ではない。どんな衣装を着用しようが、女は一目で見分けられるのさ！

典型スレンダー美少女、ここに降臨。

「おじょおさん、唐突ですが、ちよっとそこらで一休みしませんか？」

「へ？」

ガッーン、

なんか衝撃がきた！ で、俺の意識は思いつきり肉体の外へとはじき出されてしまった！

なんだ、なんだ、何が起きた！？

「……っ、なんでもないんだ、ごめん、急にヘンな言葉を口走っていた」

「そ、そう？ どうしたの、顔色悪いよ？」

すげえ精神力だな、さすがは勇者。俺のこと、追い出しやがったよ。

だが、負けん！

美味しそうな美少女を前に引き下がるは雄の恥！

負けんぞ、勇者！

キサマの生まれを、いや、俺と同調出来ることを呪うがいい！

## いつもの町並み 1（後書き）

縛りその2が存外にキツすぎる・・・ちよい緩めて、お題一つで一回やり逃げに変更。

## いつもの町並み 2

俺は負けん！と意気込んで、も一度勇者の身体に強制憑依！

キサマはそこをどけ！ 大人しくこの身体を俺に明け渡すがいい！

「くっ、」

がくりと膝をつき、勇者は頭を抱え込む。無理に抵抗すると魂が引き千切れちまうぜー？

へっへっへっ、無駄な抵抗はよしなあ。

『パン！』

うわ、びっくりした！

慌てて、無理やり入り込もうとしていた霊体を勇者からすっば抜く。そろーりと後ろを振り返ると、ぷうと頬を膨らませる女神フィリアが。

帰ったんじゃないかったのか、うわ、気まずー！

金縛りに謎の頭痛のセットから逃れ、勇者はなんとか立ち上がり隣の美少女に介抱されてる。

首をかしげなくなるその気持ち、解かるぜ。俺もなんでバレたかなとか、さっぱりだ。

「なにをしているのですか、介入はいけないと申し渡したばかりなのに。」

「いやー、いきなり追い出されてしまったもんで、慌てたんですよ。他意はないです、ホントホント。」

俺はぺろりと嘘をつく。

平然と嘘を並べ立てるだけの度胸なくして、ナンパ師なんぞ勤まるもんか、てね。

俺の誤魔化しに女神フィリアは疑わしげな視線を向けてくる。でも、疑うってことは、さすがの神様にも下界の隅々までを見通す力はないって事だよな。まあ、彼女が半人前だからってのもあるだろうけど。

スベテお見通しってな事なら、こっちの人生、楽しみが半減しまう。

ちょっと苦しいが、ならばこうだ。女神の両手をそっと包むように捧げ持ち。

「いやだなあ、何を疑ってるんですか、俺にはもう貴女がいるじゃないですか。」

女神に届け、俺の迫真の演技力！

「嘘おっしやい、その娘を口説いていたではないですか。」  
オウ、バレバレーノ。

誰だよ、下界の隅々までは見通せないとか無責任発言かましたヤロウは。

俺ですけどね。

上目遣いのロリ女神フィリア。怒ってるというよりは、拗ねてるよな、この顔は。

完全にダメになってないなら、こっちのモンだ。ロリ美少女とお別れするのはやっぱり惜しい。

ここは、しらばっくれるぜ！ 全力でな！

「違いますよ、俺はこっちに来て間もないんですよ？ 何も解からないから、彼女に色々と教えてもらおうとしてただけじゃないですか。」

「……………」

ますます胡散臭げに俺を見る女神。

まだ疑ってるか、しゃーねえなあ。

女神の目をじっと見る。向こうも見つめ返してくるまで沈黙で待機だ。

気配に気付いて、あらぬ方向をさまよっていたフィリアの瞳が俺を捉える。

ロックオン。

声を落として静かに語りかけるぜ、黙って俺を信じるんだ、子猫ちゃん。

「俺がそんなに節操のない人間だと思ってるんですか？　俺が、誰にでもあんな事をする男だと、そう思ってるんですか？　……ちょっとシヨックだな。」

必殺視線外し。至近距離で合わせた視線をふいに逸らす高等テクだ。

「だいたい、もし見てたとか言うなら声掛けてくれたらいいんだ。突然、貴女が消えてしまって、どれほど焦ったか……。」

お、女神のお手々が動揺してる。あと一押し。

知らない方がいいことなんて、世の中ゴマンとある、そうは思わないかい？　ベイベー！

たええ真実を知っていたとしても、知らないフリをした方が、より幸せになれるんだ。俺が浮気をしようとしてただなんて……『マボロシだった』んだ。ほら、そう思うだけで、すべてが薔薇色になるんだよ。

じゃあ、そろそろ仕上げにかかろうか。

「本当に、突然のことで慌てただけですよ。なんとか彼に受け入れてもらおうと努力してたんですって。……それとも見てたとか言うんですか？　俺が苦労してんのに、知らん顔で？」

ちよいとカマ掛けをね、んで。

「あ、ごめん、今の無しね、なし。」あはは。なんてね。

女神の反応は、『申し訳なさそう』

「ご、ごめんなさい、パン。……あの、言い訳ですが、天界に帰ると貴方の様子が見えなくなってしまうのです……。それで、不安になって、つい……。」

イエッス！　俺は勝った、この駆け引きの終止符は今打たれたのだ。

言質は取った、つまり女神は俺が下界でする事を『見てはいない』！

いける、この勝負、もらったー！！

「女神様……いや、フィリア。何度でも繰り返すけど、俺は貴女だけだよ。信じて。」

「パン、」

信じる者は救われるのだよ、さあ。

「信じ……ます、」

OK、フォロー完了。

うるうると泣き出しそうな女神をしっかりと抱きしめて。

俺の笑みは悪魔だったかも知れない。うん。

## 占い師の予言 1

ふう、やれやれだぜ。

なんとか女神を神界へと追い払……いや、お見送りして、俺は晴れやかな気分で額の汗を拭う。

監視付きでは折角のワンダラーライフを満喫出来やしないだろ。

さてと、ゲームの続きを始めるか。ナンパはゲームさ！

あれ、さっきのスレンダー美少女はどこへ行った？

どうせ勇者の傍に居るだろうから、勇者を探すか、なんて思った途端の出来事だ。

走るように景色が流れ、あっという間に俺はどこかの田舎町に立っていた。

四辻の真ん中に立って、ボーゼン自失。

と、目の前の宿屋らしき大きな建物の扉が開いて、中から勇者が現れた。ここに泊まってたのか。

続いて美少女。よく見れば、宿屋の向こうにさっきも見えた教会だかの高い塔が見えている。さっきの場所からさほど離れてはいないみたいだな。しかし、念じただけで勇者の傍へジャンプ出来るとは便利なもんだ。

相変わらず、会話はチンプンカンプンだが。これが勇者に憑依すると、すんなり理解出来るようになるんだから面白いよな。

俺はふわふわ浮いてる状態だ。だから、こんな風に勇者の頭を肘掛けにしてみたりも出来るわけだが。

「ピート、気を落とさないでよ。すべての道が絶たれたわけじゃないんだからさ。」

お？ 美少女の言葉が解かるようになったぞ。どうやら勇者に触れているだけでも憑依状態認定って事のようだ。

「ああ、解かつてる。……しかし、唯一の手がかりが消えてしまっ

た事も事実だ。伝承の唄の秘密が此処でようやく解き明かされるはずだったのに、そう思うとどうにも気持ちが悪まらなくてな。」

ずいぶんと落ち込んでる様子だが、聞いている俺にはさっぱりワケが解からん。

手掛かり？ 伝承？ ナニソレオイシイ？

でもさ、見えてないから解からんのだろうけど、ある意味ものすごく間抜けなポーズだぞ、勇者よ。

頭を肘掛けにされてる勇者が真剣な顔で美少女に視線を向けても、妙にシニールだ。俺が勇者の頭を座布団代わりに、空中に寝そべっていたりするからな。どーゆーコントだ、これ。

俺の腕を頭に乗つけてクソ真面目な顔の勇者が続ける。

「この春から先、魔王軍の侵攻もびたりと止んだ。何かが起きているんだ、伝承にある『滅びの時』が近いのかも知れない。もしそうだとしたら、突然、魔都へ引き返した魔王の行動にも納得がいく。」

「第三次正統戦役のこと？ あの時、魔王が不在だって言ってたけど…… 本当だったんだ、」

なにやら深刻な会話を繰り広げる二人と見学者状態の幽霊一人。

勇者は思案顔で腕を組み、美少女は言葉の選択に戸惑った風。幽霊の俺が勇者を肘掛け枕にしているせいで雰囲気はぶち壊したが。

「聖騎士団はかろうじて全滅を免れたような状態で、王国は未だ復興の兆しも見えないと聞いている。

俺たちが出向いたところで、出来る事などありはしないのだろうが…… 歯がゆいものだ。」

なんか知らんが勇者というだけあって、相当賢そうな台詞ばかり。事情が呑めない俺にはナンノコトヤラ？と感じただけだな。説明を求む！とかいって虚空に向かって叫びだしたい。さっぱり解からない単語のオンパレードだ。

魔王軍とかナンチャラ戦役とか、滅びのバーストストリームだとか、俺にも解かるように説明しろや！

つまり、なんだ、この世界には魔王なんてのが居て、ソイツがものすごく強い、と？

で、どっかの国だかが滅ぼされる寸前って話で合ってるのか？

聖騎士団とかつてのが、その国の戦力の何割なのかは知らんけども、ヤバいって話みたいだな。

「ピート、もし……もしも、だよ？　もし、もう一度魔王軍の侵攻が始まったら、王国は……」

「壊滅するだろう。……中央大陸はすでに奴等の手に落ちた。強大な敵軍の前には人間一人の力なんて、無いに等しいんだ……。」  
ヤケクソみたいな笑顔だな、勇者一人じゃどうにも出来ない現実の壁に立ち塞がられましたー、てな感じに悲壮感漂ってるよ。立ち向かつてはみたが、圧倒的な力の差を見せつけられただけ、なんて時には絶望するもんだが、そんな感じでヤケになっただけかな。

「そんな、」

美少女の方も深刻だ、なんかその国と関係有るのかな、この二人うるうるしだしたと思ったら、美少女は涙を流して泣き始めた。

おーい、勇者のくせに女泣かすな、コラ。自分で泣かshいてオロオロしてるし。仕方ねえなあ、今度は逆らうなよ、お前は女性の扱い方を知らなさ過ぎるだろ。  
すばつとな。

途端に視界が変わる、端っこに映りこんでいた蜂蜜色の髪の毛をちよいと摘まんで透き流し。

イツ、シヨータイム。

## 占い師の予言 1（後書き）

縛りその2は蹴たぐり倒すことにしました。おにゃのことワチャワチャする事にかまけていたら話が進まん。ハーレム要員は日替わり定食分いりゃいいだろ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2289u/>

---

お題サイトから貰ってきた題材で作品書いてみる実験

2011年10月9日02時26分発行